第二章　幽暗大井ケ原

一

その日、坂崎磐音は六間湯の帰りに髪結い床に回った。深川の長屋住まいを始めてからは、始めてのことだ。

「浪人さんは、どてらの金兵衛さんのとこの人だね」

六間堀のそばに剃刀と櫛の絵を障子に描いて看板にした熊床は、親父の名の熊五郎から名付けられた髪結い床だ。

開け放たれた障子の向こうの堀の水が、熊床の天井にきらきらと反射していた。

「金兵衛どのの異名はどてらですか」

「夏でもよ、どてらを着てふらふらしてらあ、まるで溝に湧いたぼうふらのようだぜ」

熊五郎親方はひどいことを言った。

「それに小言の金兵衛とも言われてるな」

「親方、鳶が鷹を生むってのはほんとだねえ」

床屋の隅で将棋を指していた棒手振の男が言った。小梅村あたりの百姓家から仕入れた青菜を売り歩く棟次だ。

「今津屋のおこんちゃんのことか、ありゃ、正真正銘の鷹だ。ふるいつきたくなるような美人だもんな」

「だがよ、玉に瑕は気の強いこったぜ」

「棟次、言い寄って袖にされたか」

「親方、棟次が邪険にされたなんぞは、今に始まったこっちゃねえぜ。餓鬼の時分からのお定まりだ。おこんちゃんに付文したのは、棟次が７つのときかね」

将棋の相手の左官の久作が言い出した。

壁塗り職人は足場から落ちて腕を折ったとかで、仕事を休んでいた。

「寺子屋の帰りにおこんちゃんに手渡したらよ、次の日、寺子屋の壁におれの付文が朱入りで貼りだされてたんだぜ。師匠に、棟次、付文をするなら、もそっと上手に書けとどなられたっけ」

当人があっけらかんと告白した。

熊床の面にも白々とした夏の光が散乱していた。

「旦那、これで女に会いに行っていいぜ」

親方が磐音の肩にかけていた布を取ると、出来をしげしげと眺めて言った。

「ならば、それがしもおこんどのに付文を届けに参ろうか」

「おや、旦那もなかなか言うね」

棟次が手にした駒をかちゃんかちゃんさせながら言った。

「それは冗談。それがしの相手は男だな」

「そりゃ気の毒なこった」

親方の声に送られて熊床を出ると、いったん長屋に戻った。すると、どてらの金兵衛がどてらを着て、抜けるような青空を見上げていた。

「ひと雨ほしいところだがな」

「夏風邪でも引かれたか」

「あんまり熱いんでどてらを蹴飛ばしたらしいや。そのせいで風邪だ。年は取りたくないね」

と言った大家は、磐音の頭を見て、

「なんぞ厄介ごとですかね」

「厄介は厄介ですね、なにしろ旧藩の者と会うのですから」

「おまえさんも元の鞘に納まるといいがね。なんたって侍は主持ちじゃねえといけねえや」

金兵衛は磐音の復職を願って、そう言った。

「大家どのには心配をかけますね」

磐音は結い上げたばかりの頭を下げて、長屋に戻った。

過日、南町奉行所の切れ者、年番方与力の笹塚孫一は、深川不動の賭場の手入れに行った折り、磐音に五両の報奨をくれた。

金貸しの権造に貰った金子の残りと合わせて、なんと六両もの大金が懐にあった。

それが磐音の気持ちに余裕を持たせて、湯屋と床屋に行かせた理由の一つでもあった。

長屋の戸口を開けっ放しにして、古着屋から購ってきた単衣と夏袴を身に着けた。脇差しを差して、亡き友の位牌の前に座った。

「琴平、慎之輔、舞どの、いよいよそなたらが死んだ謎を解きほぐすときが参った。どうか、力にになってくれ」

合掌すると、立ち上がった。

坂崎家伝来の包平を差し落として腰を揺すり、安定させた。

（よし）

口の中で呟くと長屋を出た。

「おやまあ、今日はどんな風の吹き回しだねえ」

長屋の住人の一人、水飴売りの五作の女房おたねが磐音の姿を見て言った。

「野暮用にござる」

そう言い残した磐音は、長屋からお籾蔵の白壁沿いに大川に出ると左岸を下った。小名木川に架かる万年橋を渡り、霊雲院の前から清住町へ、さらに仙台堀を渡って深川佐賀町にぬけ、永代橋に出た。

夏の太陽は中天にあって、橋の上をぎらぎらと照らしつけていた。

遮るものもない、長さ百二十間の橋を磐音は東から西に渡った。さらに御船手番所前に架けられた豊海橋を渡る。

磐音の足は大川河口を塞ぐように浮かぶ佃島の対岸、鐵砲洲に向かっていた。

呼び出しの場に到着したのは、暑い盛の８つ過ぎだ。

鐵砲洲河岸の料亭深山亭の門前にはすでに、菅笠を被り、白絽を着流した武士が立っていた。

「これは中居様、お呼び立てをいたしましたそれがしがおくれて、なんとも相済まぬことにございます」

磐音は関前藩江戸屋敷の御直目付、中居半蔵に頭を下げた。

御直目付は、家老をはじめ重役諸職の勤務を監察する役職である。

禄高は七百石で、家臣たちから、

「御直目付どのは謹厳実直、その上癇性」

と恐れられていた。

菅笠の下の顔は顎がしっかりと張り、剃ったばかりの髭痕が青々としていた。背丈は五尺六寸余、がっちりとした体格であった。

「なんの、こちらが約定刻限より早かっただけじゃ」

と磊落に応じると、

「いつかはそなたから呼び出しがあると思うておった」

と言った。

坂崎家は中老職で、禄高も六百三十石と、家格は中居家とほぼ同じだ。だが、半蔵は、磐音より十歳ほど年上の三十九歳であった。

お互い他人行儀な口調で会話を交わした。

磐音が江戸藩邸にいた頃、中居半蔵と親しく口を利いたという覚えはなかった。

「ほう、それはまたどうしてですか」

半蔵が後ろの料理茶屋を振り返った。

「過日、ここで江戸次席家老宍戸有朝様の着任祝いがあった。祝いといえば体はよいが、江戸宍戸派の踏み絵の宴。そなたは、それがしが出席したことを承知でここにわざわざ呼び出したのではないのか。」

磐音は首の後ろを手でぽんぽんと叩いた。

「御直目付どのには小細工は無用でした。謝ります」

潔く磐音は頭を下げた。

「宍戸派は牙城の料理屋に上がるわけにはいくまい」

中居半蔵はすたすたと鉄砲洲を南に向かって歩き出した。

左手の海には帆船が往来し、佃島沖には帆を畳んだ千斛船が停泊していた。大方、上方から下りものの荷を積んできた船であろう。

「ちょっと待ってくれ」

中居は、今しも佃島に向かおうとした渡し舟を止めると乗り込んだ。

磐音も続いた。

渡しの船頭が竿を一突きして櫓に変えた。

夏の海に、青葉を繁らせた島がぽっかりと浮かんで渡しを迎えた。

『遊歴雑記』に、

「海上の眺望は風色いはん方なし」

と評された風景である。

渡し舟は、石垣が積まれ杭が並び立つ船着場に到着した。

渡し賃を二人分払った中居半蔵は、船着場近くの葦簀張りの店に磐音を連れて行った。漁師の女房が片手間にやっているような、安直な店だ。

「深山亭というわけにはいかぬが、酒肴はこちらがずっと美味い」

と言いながら、江戸の海に張り出すように作られた板の間に磐音を案内した。

二人は卓を挟んで向かい合った。

「食い物は話のあとだ」

と中居半蔵は慣れた様子で酒だけを注文した。

「坂崎、本らならば国許で藩の財政に大鉈を振るっているところであろうに。小林琴平、河出慎之輔両人のこと、誠に持って言葉も無い」

磐音は黙って頭を下げた。

「今日、それがしを呼び出したは、二人の死と関わりのあることか」

「慎之輔を斬ったのは、琴平にございます。その琴平を死に至らしたのはそれがしです」

「上意討ちであったそうな。江戸藩邸をあれほど騒然とさせた事件を、それがしは知らぬ」

陽に焼けた顔の女が酒を運んできた。

二人は会話を中断すると、酒を注ぎ合った。

「まずは一献」

中居の音頭で杯の酒を飲んだ。

「坂崎にはなんの罪とかもない。が、そなたは藩に暇乞いをして江戸に出て参った。その気持ち、察して余りある」

中居半蔵の顔には厳しい表情があった。

「坂崎、単刀直入に訊く。むろん、中居半蔵個人の気持ちでもあり、御直目付の職分ともいえる」

「それがし、中居様を信じてようございますか」

「そなたは宍戸派の集まりにそれがしが出たことに拘っておられるか」

「はい」

「目付の役目、知らんでは済まされぬ役職でな。糞にたかる蝿の集まりにも如才なく顔をだす」

険しい顔で吐き捨てた。

「今ひとつお尋ねいたします。中居様の忠義は、たれをもって第一となされますか」

「知れたこと。藩主福坂実高様ご一人じゃ」

「中居様、失礼の数々お許しくだされ。それがしの胸の疑い、正直に相談いたします」

頷いた中居半蔵が、

「その前にこちらからも訊きたきことがある。過日、藩邸近くで入来爲八郎と黒河内乾山の死体が転がっておるのが発見された。この二人を斬ったのは、そなたじゃな」

「はい、二人は勘定方上野伊織を惨殺した下手人にござれば、仇を討ちましてございます」

「やはりそうであったか」

と首肯した中居半蔵は、

「お互い胸のうちをさらけだそうではないか」

と提案した。

頷いた磐音から話しだした。

「中居様、上野伊織は御文庫に帳簿を調べに参って、宍戸派の知ることとなり、拷問を受けた上に殺され、警告の意を含めてそれがしの住む長屋近くの堀に投げ込まれたのでございます」

中居はしばらく黙っていたが、訊いてきた。

「帳簿とはなんの帳簿かな」

「中居様は、江戸家老の篠原三左様の名で大阪の両替商天王寺や五兵衛に八千両、近江屋彦四郎に三千五百両、江戸京橋の同業藤屋丹右衛門に五千両と、都合一万六千五百両の借財があることをご存知ですか。

中居は、承知しているもしていないとも答えなかった。だが、驚愕の色が知らなかったことを物語っているようであった。

「篠原様はこの大金を持って天領飛騨から切り出された材木を買い集めに走れ、江戸に運び込まれました。が、明和九年２月の大火で、値上がりすべき材木は灰燼に帰したのでございます」

「な、なんと」

「豊後関前藩には、従来からの借財に加えて、一万六千五百両の借金と利息が増えたことになります。この新たな借金を病がちの篠原様が行われたとか」

「棺桶に片足を突っ込まれたご家老には出来ぬ相談じゃな」

中居半蔵は言い切った。

「そなた、その事実をどうやって調べた」

「両国西広小路の両替商、今津屋の手蔓でしりましてございます」

「ほう、そなた、江戸でも一、二を争う両替商と昵懇か」

「ちとわけがございまして」

磐音が答え、中居はそれ以上追及しなかった。

「上野伊織が殺される前に、それがしが予想だにせぬことを知らせに参りました。中居様もご存知のように、江戸にあるとき、我らは修学会という集まりを催しておりました。琴平も慎之輔も伊織も仲間にございました。昨年の初夏、われらは江戸を離れ、国許に帰参しました。その知らせが江戸屋敷に届くやいなや、中居様は修学会を中止なされたそうな」

「坂崎、宍戸派は気を高ぶらせておった。いかなる不測の事態が起こらぬとも限ったからだ。」

磐音はしばら沈思した後、頷いた。御直目付のとった行動にも一理あると思ったからだ；

「上野伊織は、国表の我らの事件、舞どのの不義騒ぎを撒き散らし、我らを同士討ちさせた背後にはなんぞ隠された謎があるのではないか、同士討ちにするよう仕向けた人物がいるのではないかと、それがしに示唆したのでございます。中居様、この事、どのように考えられますか」

中居はしばらく両手で顔を覆い、上下に動かしながら考えに落ちた。

両手をとった中居の顔は苦悩に満ちていた。

「不正に借りられた大金、そなたたちの刃傷事件、そして上野伊織の死はすべて関わりがあると申すか」

「それがし、伊織が殺されたときにそのことを実感してございます。そして、此度、国表では、それがしの父が国家老宍戸文六様に蟄居閉門に命じられたそうな」

「うっ」

という呻き声を漏らした中居は、一瞬後、合点した様子で、

「早足の仁助か」

と呟いた。

「坂崎、そなたの申すこと、得心がいかなくもない。だが、証拠がない。藩を専断する宍戸派を追い落とすには、確たる証拠がなければならぬ」

「たしかに」

「だが、それがしがかねがね気になっていたことを氷解させてくれたことも確かじゃ」

中居半蔵は空になっていた時分の杯に酒を注いだ。そして、磐音の杯も空と気づくと。

「これは失礼した」

と言いながら注いでくれた。

「そなたは神田三崎町の佐々木玲圓門下であったな。江戸に出て以後、先生とあうたか」

「はい。過日、先生から道場を訪ねてくれるように伝言がございましたので、参りました」

「うん」

と答えた中居は不意に話題を元に戻した。

「仁助が届けてきた早打ちじゃが、国許では、当分粛清と暗殺の嵐が吹き荒れようと書いてきた。そなたの父上、坂崎正睦様の蟄居閉門も強引な宍戸様の専横じゃ。殿が江戸参府に出られた好きになんという恥知らずか」

中居半蔵の顔が怒りで朱に染まったように見えた。が、それは一瞬のことだった。

「坂崎、豊後関前藩六万石は獅子身中の虫を抱えておる。それも国許、江戸と大勢が、忠臣面で巣食っておるわ。こやつらを退治するには生半可なことでは参らぬ」

「今度、次席家老に宍戸有朝様が着任なされ、さらに江戸藩邸に宍戸派は強化されたように思えます。人数は何人と数えればよいのでございますか」

「ただ今は二十一人、参府の行列が江戸に到着すれば、三十六、七人になろうか」

中居半蔵はすべてを把握している様子で明快に答えた。

「かなりの数にございますな」

「六万石の家中にはびこる虫二しては数が多い」

「どうしたもので」

「そなたが今津屋と親しき仲なれば、篠原様の名ものと、京橋の藤屋丹右衛門への五千両借受の場に立ち合った者がだれか、聞き出してはくれぬか」

「承知しました」

「それがしの上野伊織が叶わなかったご文庫の帳簿を調べる」

と請け合った。

「坂崎、それがしに繋をつける途を持っておるようじゃな。だが、江戸屋敷の者を動かすのは考えものじゃ。いや、その者が信頼ならんと言っておるのではない。伊織の二の舞を気にせねばならぬ」

磐音も野衣に危険なことを続けさせる気はなかった。

「それがしは、その昔、佐々木先生の門弟の一人でな、親しき交わりもあった。今ではその事を承知しておる藩の人間はおるまい。なんぞあれば佐々木先生のもとに手紙を届けよ。すぐにもそれがしに届くよう手配しておく」

まさか中居半蔵が佐々木玲圓門下とは考えもしなかった。

「かしこまりました。それがしに連絡をつけられる際は今津屋にお願い致します。店を仕切る老分番頭野由蔵どのか、奥向きの女中おこんさんなれば、それがしの手元にすぐに知らせが参ります」

分かった途応じた中居半蔵がようやく顔の表情を和らげ、

「殿の参府行列は箱根の山にかかったあたりであろう。宍戸派の面々にお会いになる前に、なんとか国許に事情をお知らせしたいもんじゃが」

と胸の杞憂を呟くように言った。

「御直目付の苦労を察しいたします」

「文六めの目付役であった福坂志山様が病に倒れられたことが、文六を増長させる一因にもなっておる」

「志山様が病に…」

「おお、二月も前のことじゃ」

志山は藩主実高の叔父で、宍戸文六の言動の是非に文句をつけることのできる人物であった。

不意に中居半蔵が磐音の顔を見た。

「そなたらが国許に健在なればな」

と嘆いた中居が、

「いや、そうではないぞ。そなたが藩の外におることは、かえって好都合かも知れぬ」

と言い直した。

「中居様、それがし、もはや豊後関前藩の家臣ではありませぬ」

「ならば、なぜそれがしを呼び出した」

「…………」

亡き友のためであり、真実を知るためであった。

「殿もそなたを藩外に出したなどとはお考えになっておられぬわ。それにそなたの父上のこともある。正睦様が不正を働くなどということがあろうか。それを文六め、己の悪行を棚に上げ、、中老を藩政から遠ざけおった。坂崎、数少ないが、国許にも心ある藩士は残っておる。必ずやお父上野助けになっておろうから、心配いたすな」

「はっ」

と畏まった磐音を見た中居半蔵は手を叩いて、

「新しい酒と料理を運んでくれ」

と命じた。

二人は江戸の海で獲れた新鮮な魚をあてに酒を飲み、佃島からの終い船で江戸の町に戻ってきた。船着場で左右に別れようとすると中居半蔵が、

「そなた、関前に行くことになるやもしれぬな」

と言った。

「必要なれば」

と答えながら、国許で苦労しているという奈緒の顔が浮かんだ。